

論 文

交換價值と價值

— 價值法則論を中心として —

山 本 二 三 丸

われわれはまず、問題の手紙、すなわち、マルクスのクーゲルマンに宛てた一八六八年七月十一日附の手紙をみることにしよう。紙數の都合もあり、さしあたり必要でない最初のパラグラフと最後の二つのパラグラフとを省いて、中心的な部分をのこすそのまま、つきにかかげることにした。のちに見られるように、わずかひとつのパラグラフを勝手に選びだしてきて引用することは、知らぬうちに、その正確な意味を見誤まることになるからである。

『ツェントラルブラット』紙についていえば、あの男は最大可能の讓歩をしているのです。それは、いやしくも價值ということ
を考ふるならば、當然わたくしの結論を承認しなければならぬことを認めているからです。しかもあわれむべきこの先生には、

わたくしの著書のなかに『價值』にかんする章がひとつもなくとも、わたくしのなしている現實的諸關係の分析こそは現實の價值關係の論證および實證をふくんでいはずだということが、わからぬのです。價值概念を論證する必要があるなどというおしべりは、ひとえに、問題たる事象についても科學の方法についてもまったく無知であることから、でてきているのです。あえて一年といわず、二、三週間でも勞働を停止すれば、どんな國民でものこらず死んでしまうであろうことは、どんな子供でも知っています。同様に、種々な慾望に應ずる諸生産物總量が、社會的總勞働の種々な、量的に一定した總量を必要とすることも、どんな子供でも知っています。社會的勞働を一定の比率で配分すべきこの必要が、社會的生産の一定の形態によつてはけつして揚棄されるものではなく、ただその現象様式を變えるのみだ、ということも、自明のことです。諸自然法則は、一般にけつして揚棄されなぬものです。歴史的に異なつた諸狀態のもとで變りうるのは、かの諸自然法則が自己を貫徹する形態だけです。そして社會的勞働の關連が個人的な諸勞働生産物の私的交換としておこなわれているような社會狀態において、勞働のこの比率的な配分の遂行される形態は、まさに、これら生産物の交換價值なのです。

科學の本領は、まさに、價值法則がいかに自己を貫徹するかを解明する點にあるのです。だから、一見してこの法則と矛盾するようならあらゆる現象を最初から『説明』しようとするならば、科學より以前に科學を提供せねばならぬでしょう。リカアドウが、その著書の價值をあつかつた第一章において、まず最初に解明されるべきあらゆる可能な諸範疇を與えられたものと前提し、これによつてそれらの妥當性を證明しようとしているのは、まさしくかれの誤謬です。

たしかに他方では、貴方が正しく想定されたように、價值關係の理解が、明瞭不明瞭の差こそあれ、また幻想によつて飾られているか科學的に規定されているかの差こそあれ、つねに同一であつたことは、學說史の證明するところです。思惟過程そのものが諸關係から生ずるものであり、それ自身ひとつの自然過程なのですから、現實的に把握する思惟は、つねに同一のものでしかないのであつて、發展が成熟し、したがつてまた思惟の器官が成熟したのちに、漸次に相違してくるにすぎません。それ以外のことはすべてたわごとなのです。

俗流經濟學者は、現實の日々の交換比率と價値の大きさが直接的に同一ではありえない、ということに全然気がつかない。ブルジョア社會の機才は、まさに、生産の意識的、社會的な規制は、そもそものはじめからおこなわれたい、という點にあるのです。理性的なものや自然必然的なものは、ただ盲目的に作用する平均としてのみ、みずから貫徹するのです。そこで、俗物は、內的關連がばくろされてみると、事象は現象においては別の趣きを呈すると主張して、それで一大発見でもしたつもりなのです。實際は、かれは、假象にしがみついてこれを最後のなものと考へるのだ、と主張しているわけです。これでは、いったい、科學はなんの役に立つてしょうか？

しかし事象は、この場合、なおもうひとつの背景をもっています。關連への洞察とともに、實踐的崩壞にさきだつて、現存狀態の永遠的必然性にたいするいっさいの理論的信念が崩壞するのです。だから、この場合、内容空疎な混亂を永遠化することが、支配階級の絶對的利益なのです。そして、經濟學上では一般に思惟してはならぬ、ということよりほかにはなんらの科學的切り札も出せない、お追從的謠言家たちは、それ以外のなんのためにお手當をもらうのでしょうか？」(Karl Marx: Brief an Kugelmann (aus den Jahren von 1862 bis 1874), Elementarbücher, S. 53—55. なお、インスティトゥット版『資本論』第一卷、八三八—八三九ページ参照)

二

この手紙の内容を正確にとらえるために、われわれは、第一のパラグラフから、ひとつひとつの文章について、丹念に検討してゆくことにしよう。

まず、第一のパラグラフは、内容の點からみて、つぎの三つの部分にわけられる。さきに行つてしばしば引合ひにだし、また、對照して考察する必要があるので、便宜上、以下各部分に番號を附けておき、各部分の内容をはじめに

説明しておくことにする。

①「しかもあわれむべきこの先生には、わたくしの著書のなかに『価値』にかんする章がひとつもなくとも、わたくしのなしている現実的諸關係の分析こそは現實の價值關係の論證および實證をふくんではずだということが、わからないのです。價值概念を論證する必要があるなどというおしゃべりは、ひとえに、問題たる事象についても科学の方法についてもまったく無知であることから、できてきているのです」。

ここに述べられているのは、この手紙の論旨を要約したものである。

まず、「現實的諸關係の分析こそは現實の價值關係の論證および實證をふくんではずだ」とは、どういうことか？ それは、價值なるものが、けっしてたんなる概念としてのみ存在するものではなく、實在する價值關係としてとらえられなければならないこと、したがって、まず現實の交換關係の分析を通じて明らかにされなければならないこと、を意味している。のみならず、ここに述べられている「現實的諸關係」は、のちに見られるごとく、むしろ一見して價値の『概念』に反するとき諸關係にほかならないもの、と考えるべきである。それゆえ、一見して價值概念に反するとき現實的諸關係の分析も、實は、現實の價值關係を實證するものだ、ということがまず指摘されているのである。

つぎに、「問題たる事象」とはなにか？ これは、ついでにある「現實的諸關係」でもあり、またのちに⑤で述べられている「この法則に矛盾するようなあらゆる現象」にあたるものである。すなわち、われわれがとりあげる經濟的諸現象は、なるほど、經濟諸法則があらわれる形態であり、これらの諸現象をはなれては經濟法則なるもの（あるいは經濟的諸範疇）は存在しえないが、しかし、經濟法則は、そのまま概念に一致した形で、現象にあらわれるもの

ではない。このような現象、本質（または法則）との關係においてみた場合の現象が、ここにいう「問題たる事象」である。

だが、本質と現象とがつねに一致するならば、およそ科學は不必要である。「科學の方法」とは、實に、この本質、すなわち法則が、現象を通じてのみあらわれ、しかも、それ自身と一見矛盾するような現象形態をとってあらわれる點を究明するものなのである。このようにして、「問題たる事象」と「科學の方法」とを、この場合、「價值」の問題にむすびつけて理解するならば、「問題たる事象」とは、現實の交換關係であり、「科學の方法」とは、この現實の交換關係を通じて貫徹される價值法則を究明するものだ、ということができよう。^(註)そこで、この間の事情を説明するものとして、つぎの敘述がつづくのである。

(註) 「問題たる事象」とは、一般に價值理論の對象となる事柄を指すものとも解せられるが、嚴密に言えば、本質と現象との辨證法的關係が問題となるべき事柄を指すものでなければならぬ。なお立ちいつた説明をひかえるが、ここで述べられている「價值概念を論證する必要があるなどというおしやべり」という言葉は、きわめて含蓄あるものである。商品と商品關係として、價值は價值關係として正しく現實の生産關係から説明しようとはしないで、たんに言葉として（あるいは、——ありふれた哲學的表現をかりれば——「論理」として）價值概念、使用價值概念、さては、資本概念を論ずる、ヘーゲルまがいの未熟な『概念構成理論』が、ともすれば横行しがちである。例の遊部氏ほか一連の「季刊理論派」諸氏の『價值理論』がまさしく、その見本である。

②「あえて一年といわず、二、三週間でも勞働を停止すれば、どんな國民でもものごらず死んでしまうことは、どんな子供でも知っています。同様に、種々な慾望に應ずる諸生産總量が、社會的總勞働の種々な、量的に一定した總量を必要とすること、どんな子供でも知っています。」

「勞働を停止すれば、どんな國民でものこらず死んでしまう」とは、どういふことか？ それは、社會を支えるものが、必要な生活物資を生産する勞働であるといふことである。勞働なしには、人間も、したがって人間社會も存立しえない。ここでは、人間の生活にとって必要な生産物、すなわち使用價值をつくり出す、具體的な有用勞働がとり上げられている。この種の勞働は、いづれの社會においても、必要不可欠なもの、いわば、自然必然事である。

「種々な慾望に應ずる諸生産物總量が、社會的總勞働の種々な量的に一定した總量を必要とする」とは、社會の存続にとって必要な諸物資は、それぞれその特定の使用價值に應じた具體的な有用勞働によってつくられなければならないこと、したがって、社會が多少とも發展し、人間の慾望がふえ、必要物資が多様化するにつれて具體的勞働も多様化し、社會的總勞働はこれに應じて各勞働部門に割當てられなければならないこと、を意味している。たとえば、ある社會にとって食料および衣料として小麥一億ブッシェル、綿布五億ヤードが必要であるとすれば、その社會的總勞働の中、たとえば、小麥生産に五百萬人勞働（または四千萬勞働時間）、綿布生産に三百萬人勞働、（または二千四百萬勞働時間）を割當てなければならない、といふことである。さきに人間の勞働が具體的有用的性格をもたなければならないという點がとり上げられていたとすれば、ここでは、さらにその具體的、有用的性格が一つの體制——社會的分業——において考察されていると見るべきである。社會的總勞働は、その社會の處理しうる人間的勞働の總體をあらわす。この總勞働が、社會的分業の發達に應じて、各勞働（生産）部門に配分されなければならないのは、同じく自然必然事である。

右の二つ、すなわち、社會的勞働の必要および社會的總勞働の配分の必要は、いずれの社會においても嚴に存在するところであり、そのような意味で、どちらも特定の社會形態にかかわりない自然法則といわれるのである。^(註)

(註) ことにとりあえず注意しておかなければならないのは、一般に經濟理論でいわれる自然法則なるものが、二様の、まったく異なった内容をもっていることである。そのひとつは、ここでも見られるとおり、超歴史的な法則をさすものである。ところが資本主義社會において貫徹される特定の、歴史的、社會的な經濟法則は、この社會の成員の意志、慾求のいかんにかかわらず、むしろこれらのものに反して、貫徹されるという意味で、やはり自然法則と呼ばれる。この場合には、他の歴史的社會におこなわれる經濟法則とことなつて、自然法則として、商品||資本主義的經濟法則が貫徹するところに、むしろその特質があらわれてゐる。その一例としては、價值法則、あるいは、資本制蓄積の法則などが挙げられる。以上、二種の自然法則は根本的に相異なつたものであり、はっきり區別されなければならない。これら二種の自然法則の意識的または無意識的混同は、前號に挙げた諸『定式化』のうちにあまた見出される。

ここでとくに強調しておかなければならないのは、社會的總勞動の配分の必要という、自然法則である。この法則は、たとえていえば、人間の生存にとつて勞動が不可欠であるというのと同じ意味での自然必然事をあらわしたものにすぎない。ところが、つぎにみられるごとく、この法則をば、商品生産社會にのみおこなわれる特殊な、歴史的法則であるとし、しかも、價值法則そのものであると斷ずる『理論』が、しばしば主張されている。(前號において列擧された諸『定式化』を参照)これは、ついに註で述べた二種の自然法則の混同をさらに極端におしすすめたものであるが、同時にまた、價值法則そのものについての完全な無理解をみすから示したものである。

③ 「社會的勞動を一定の比率で配分すべき」の必要が、社會的生産の一定の形態によつてはけつして揚棄されるものではなく、ただその現象形態を變えうるのみだ、といふことも、自明のことです。諸自然法則は、一般にけつして揚棄されえないものです。歴史的に異なつた諸状態のもとで變りうるのは、かの諸自然法則が自己を貫徹する形態だけです。そして、社會的勞動の關連が個

人的な諸労働生産物の私的交換としておこなわれているような社會状態において、労働のこの比率的な配分の遂行される形態は、まさに、これら生産物の交換價值なのです。

ここで明確に述べられているのは、まず、社會的労働の配分の必要という自然法則と、この法則が具體的に實現される形態とが、まったく相異なつたものだというのである。前者は、自然法則としていついかなる社會でも實現されなければならぬもの、社會形態のいかにかわりない、いわば、永久不變の法則である。これに反して、後者は、社會形態のことなるにしたがって變らなければならぬいとつゝの形態にほかならない。それは、歴史的、社會的なもの、變化するものである。

つぎに、明らかにされているのは、右の自然法則が、それぞれの歴史的な社會形態、すなわち生産様式に應じて、かならず一定の形態をとって實現されなければならない、ということである。逆にいえば、これらの特定の、具體的な歴史的形態を通じてでなければ、自然法則は貫徹されえないことである。

このようにして、社會的労働の比率的配分の必要という自然法則と、それが特定の、歴史的な社會において貫徹されるさいの歴史的な形態との根本的な相異、および、これら相互の必然的な關連とをはっきり認識しておくことは、決定的に重要である。

第三に、ここで述べられているのは、——そして、これがこのパラグラフ③の主たる狙いであるが——個人的な諸労働生産物の私的交換が支配的に行われている社會、すなわち、私的所有にもとづく商品生産社會という、特定の歴史的な社會において、右の自然法則の貫徹される形態をなすものがまさしく交換價值である、ということである。この、歴史的な形態が生産物の交換價值であるという指摘は、きわめて含蓄に富んだものである。いまその内容をつ

きに考察してみよう。

まず、強調されなければならないのは、ここには生産物の交換價值と述べられていて、けっして價值とは云われていないことである。いうまでもなく、價值と交換價值とは根本的にことなる。この點は、のちにも觸れるが、とにかく、價值と交換價值との根本的な相異（およびそれら相互の必然的關連）を銘記しておくことはきわめて重要である。これによって直ちに、「ここに述べられているのが價值法則そのものの説明である」というような、『定式化』の論理的な誤まりが明らかにされるのである。

そこで、生産物の交換價值という形態を通じて、右の自然法則が貫徹される場合を、具體的に考察してみよう。さきに擧げた小麦と綿布の生産をそのまま例にとつて、一商品生産社會が必要とする小麦量一億ブッシェル、綿布量五億ヤードとすれば、それらの生産にそれぞれ、社會的労働のうち、五百萬人分、三百萬人分が配分されれば、社會的需要に相應するだけの各生産量が得られる。ところが、實際には、ある年には小麦生産に三百五十萬人分、綿布生産に四百五十萬人分が配分され、したがって、それぞれの生産量は、たとえば、七千萬ブッシェルおよび七億五千萬ヤードとなる。この場合には、この社會は、一方で小麦の供給不足と、他方で綿布の供給過剰とに悩まされる。これにたいして、他の年には反對に、小麦生産に六百萬人分、綿布生産に二百萬人分が配分され、したがってそれぞれの生産量は一億二千萬ブッシェルおよび三億三千万ヤードとなり、社會は小麦の供給過多と綿布の供給不足とを嘗めさせられる。このようにして、商品生産社會にあつては、社會的労働の配分の必要という自然法則は、現實には、たえずその配分の必要がきわめて不完全にしか充たされないという形をとつて、あるいは別の表現をとれば、配分の必要がつねにはむしろ充たされないという形をとつて貫徹され、ただ平均的に、長期間にわたつて考察した場合にのみ、そ

の必要がどうやら充たされることになる。(われわれはここで、大多数の勤勞階級がつねに半飢餓の状態にあり、これにたいして少數の支配階級が、つねに飽滿の状態にあるという關係において、社會の必要が『充たされていゝ』という事情をば、ひとまず、考慮の外におくことにする)。要するに、私的所有にもとづく商品生産社會においては、「社會的勞働を一定の比率で配分すべき必要」は、つねに「現實には適當な比率で配分されえない」という形をとつて、實現されるのである。

つぎに、配分の遂行される形態が生産物の交換價值であるという點を、同じく右の例によつて見てみよう。はじめの、小麥の缺乏と綿布の過剩という状態のもとでは、たとえ小麥および綿布の價值は不變であるとしても(さきの例では、依然として、小麥一ブッシェル當り〇・〇五人分、綿布一ヤード當り〇・〇〇六人分)、その交換價值、すなわち價格は、變動をまぬがれない。小麥の價格は騰貴し、綿布の價格は下落する。この交換價值の變動、すなわち、價格の價值からの乖離によつて、小麥生産の増加と綿布生産の減少がひきおこされ、ここに社會的勞働の配分は事後的に訂正されることとなる。だが、訂正されるとは云つても、翌年ただちに「適當な比率」どおりになるといふのではなく、むしろ、今度はさきと反對に、小麥の過剩と綿布の缺乏とがもちきたされる。そこで、小麥の價格は下落し、綿布の價格は騰貴する。かくしてふたたび、社會的勞働の配分に變化が生ずる。

それゆゑ、「社會的勞働を一定の比率で配分すべき必要」が、つねに「現實には一定の比率で配分されえない」といふ形で實現されるということは、それが交換價值の變動、いかえれば、價格の價值からの不斷の乖離という形態を通じて、事後的に訂正されつつ實現されることなのである。さきに交換價值と價值との根本的な差異を一般的に指摘しておいたが、右の考察によつて、この場合の交換價值は、さらに特別の意味を與えられていることがわかる。それ

は、この場合の交換價值なるものが、量的にみて、價值そのものと異なっている、いいかえれば、價值から乖離した價格を意味するものだ、ということである。

以上によってみれば、この③が、けつして價值法則そのものを説明しているものでないことは、明白である。ここでは、さきの自然法則そのものと、それが實現される場合の、特殊な、歴史的形態との相違、そしてまた、商品生産社會におけるこの歴史的形態が生産物の交換價值にほかならないことが、平易かつ適確に説明されているだけである。

だが、ここで見逃されてならないことは、ここにいう「交換價值」が、現實における交換關係にほかならない、という點である。それは、價值から乖離した價格における交換の關係、ということである。それゆえ、これを逆にいえば、現實の交換關係をあらわしたものとしての交換價值は、價值そのものとはちがったものである。しかし、ちがっているとはいえ、價值そのものは、したがってまた、價值關係そのものは、このような現實の交換關係、すなわち交換價值を通じてあらわれざるをえないのである。

このようにみてくるとき、①においてあらかじめ述べられている言葉——「現實的諸關係の分析こそは現實の價值關係の論證および實證をふくんでゐるはずだ」——の内容が十分に理解されるのである。また、このような關係を見通したうえで、つぎの④の内容が正しくとらえられなければならないのである。

三

④「科學の本領は、まさに、價值法則がいかに自己を貫徹するかを解明する點にあるのです」。

この文章は、さきの①をうけて、この手紙のもっとも主要な内容を、明確にあらわしたものである。「科學の本領」は、①の「科學の方法」に對應するものであり、その意味は、要するに、現象が本質（または概念）に一致するならば、およそ科學は不用である、という周知の命題に歸着するものである。

（註）ここに括弧に入れて「科學の本領」としたが、これは、原文では、Die Wissenschaft besteht eben darin, となっているものである。「科學の方法」は、原文では、die Methode der Wissenschaft である。本誌前號（六三一—六五ページ）で述べたごとく、向坂教授は、①の「科學の方法」をば、「この科學の方法」と譯出し、④の「科學」は、「この科學」として、ともに經濟學を指すものとされているが、これは誤まりといふべきである。この手紙でとり上げているのは、けつして「經濟學の方法」ではなくして、科學の方法である。經濟學が問題なのではなくして、科學が問題なのである。經濟學はここでは他の諸科學と同じくたんに一つの科學としてのみ考察され、けつして、經濟學という特殊の、個別的な科學として考察されているのではない。ただ、自然科學の説明についてはなく、價值法則について、「科學の方法」が説明されているだけである。すなわち、價值法則そのものと、それが自己を貫徹するさいの現象形態との關係を辯證法的にとらえるべきことが主張されているのである。

この④でとくに明確にしておかなければならないのは、「價值法則がいかにかに自己を貫徹するか」という言葉である。まず、價值法則とはなにか？ これについての説明は、すでに別稿（民科編『資本論の解明』第一分冊所收、拙論『商品』の第二節、4、「價值の法則（價值の大きさ）」、同書七二—七六ページ）においてこころみたり、また本誌次號において詳細に述べることになっているので、ここでは、簡單にその内容を指摘しておくにとどめる。價值法則とは、價值の大きさは何によって決定されるか、という、價值規定の法則である。これをきわめて簡潔に表現するならば、「勞働による價值規定」、あるいは、「勞働時間による價值規定」、ということができよう。ところで、ここではさしあたり、價值法則については、つぎの點だけ指摘しておけば、十分であろう。すなわち、價值法則とは、商

品の價値の大いさが、それにふくまれてゐる抽象的、人間的勞働の量によってきまるといふこと、これを②との關係においていいかえれば、商品の價値の大いさは、そこに含まれてゐる社會的勞働の量によってはかられる、ということが出来る。社會的勞働とは、總勞働のことではなくして、社會存続の條件、社會を支えるものとしての社會的勞働のことであり、これはまた、當然、一定の社會的分業によって制約された比率的配分を同時に含んでゐるものでなければならぬ。要するに、②の自然法則の「擔い手」としての、社會的勞働である。

それゆゑ、ここで嚴にしりぞけなければならぬのは、③の中の言葉をそのままとてきて、「社會的勞働の配分の必要」がすなわち價値法則なのだ、とか、「この配分の必要が遂行される形態」が「交換の法則」であり、價値法則なのだ、とかいふ主張である。これらは、まぐれあたり論法といふべきである。さきに説明したように、「社會的勞働の配分の必要」はあらゆる社會に共通な自然法則であり、「この配分の必要が遂行される形態」は、要するに法則が貫徹される「形態」であつて、^(註) けつして法則そのものではないのである。

(註) すでに見たように、向坂教授は、この④の「價値法則」(das Wertgesetz) という言葉をしようと、「この價値法則」と譯出されてゐるが、これは誤まりである。④以前のところで述べられてゐるのは、すでにたびたびのごとく、けつして價値法則そのものの説明ではないからである。また、「勞働による價値規定」という價値法則の内容は、少くとも、A・スミスらしい、および經濟理論を學ぶ者にとっては、周知のところである。この場合、「この」という言葉を附して譯出することは、その意味でも當つてゐる。

われわれが注目すべきは、「いかに自己を貫徹するか」の、「いかに」といふ言葉である。價値法則が、そのまま概念に一致した形において實現されるか、あるいは、概念に一致しない形において自己を貫徹するか、——まさにここに「いかに」の意味がある。また、このように「いかに」の意味を明確にしたときに、はじめて、「科學の本領」とい

う言葉が、さきの「科學の方法」という言葉とあわせて、正當に理解されるのである。

さきに簡單にのべたように、社會的勞働の分量によって價值の大きさがきまるといふ價值法則は、現實の商品交換においてはけっしてそのまま實現されないで、むしろ實際には、價格がたえず價值から背離するという形で、あるいは、現實の交換比率が價值比率から乖離するという形で實現される。不斷の乖離を通じて、また通じてのみ、價值の法則は貫徹されるのである。交換價值とは、まさにその價值法則が貫徹される現象形態にほかならない。この、本質としての價值法則と、現象形態としての交換價值、——この兩者の辨證法的關係を正しく究明するところに、はじめに科學が成り立つのである。

(註) 普通には、價值が本質であり、交換價值はその現象形態といわれる。この場合の交換價值は、價值そのものが現象する形態、價值形態を指している。それは價值そのものが、絶對的にではなく、相對的に、つまり他の商品との交換關係において、他の商品に、それ自身の等價物として、關係しなければならぬことをあらわす。價值は交換價值としてしか、あらわれえないのである。それゆえ、價值と交換價值との關係は、いわば、質的なものである。これにたいして、價值法則と交換價值との關係は、いわば量的側面において本質と現象との關係をあらわすものというべきである。まず、質的關係があり、つぎに質的關係の上に量的關係がなりたつ。それゆえ、價值法則は、すでにそれ自身の中に價值の『質的』規定を含んでいるのである。

ただ、ここに注意しておかなければならないのは、「價值法則がいかに自己を貫徹するかを解明する點にある」といふ文章の最後の言葉——「解明する」である。これは、原文では *entwickeln* であり、多くの人は「展開する」と譯出している。わたくしが、ことさらに「展開する」という譯語を避けたのは、向坂教授の所論に見られるごとく、②と③との内容をば價值法則そのものの説明とみなし、④の内容は、「この價值法則がいかに貫徹されるか、價值法則貫徹の姿を追究して行くのが、『資本論』である」ということなのだ、とする諸『定式化』との差異を強調せんがために

ほかならない。これらの『定式化』は、②と③に價值法則そのものをみだし、④で、その「展開」に力點をおく。だが、わたくしは、②と③において、價值法則そのものの説明をみださず、むしろ、その自然的基礎をなす自然法則そのものと、その自然法則の遂行される形態との説明を見出し、④ではじめて價值法則についての言葉をみだすのである。わたくしが④において力點をおくのは、「展開」ではなくして、「いかに」である。②と③との説明を通じて、價值法則の一側面が明らかにされ、價值法則のとらえ方が明確にされる。そこで、價值法則がいかに自己を貫徹するか、本質と現象形態との辨證法的な關係を追究するところに科學が成り立つという、④の説明が出てくる。この場合、「いかに」とは、本質と現象との辨證法的關係を指している。しかし、④では、すでにこの「いかに」は、たんに、價值法則と交換価値、すなわち、最も簡単な、最も抽象的な本質と、そのもっとも簡単な、したがって一般的な現象形態との關係にとどまらない。生産諸關係の發展、その複雑・高度化にもなつて、これらのもっとも簡単な本質と、もっとも簡単な現象形態とは、同じく發展をとげ、より複雑化する。いいかえれば、價值と交換価値との間に、一系の範疇が介在し、また、交換価値そのものも、より具體的な形態をとることになる。これらの範疇の系列および現象諸形態の發展の關係を追究してゆくことが、つまり「展開」*entwickeln* なのである。交換価値は、そのもっとも本質的な、もっとも抽象的な關係を示すものとして、ここに擧げられている、と考えることができる。「だから」という言葉をもってはじまるパラグラフ⑤は、このことを裏書きしているのである。

⑤「だから、一見してこの法則と矛盾するようならゆる現象を最初から『説明』しようとするならば、科學より以前に、科學提を供せねばならぬでしょう。リカアドウが、その著書の價值をあつかつた第一章において、まず最初に解明されるべきあらゆる可能な範疇を與えられたものと前提し、これによってそれらの妥當性を價值法則から證明しようとしているのは、まさしくかれの誤

認す。

ここに述べられているのは、さきの④において指摘された「價值法則がいかに自己を貫徹するかを解明する」の内容を、別様に説明したものである。

價值法則がいかなる現象形態をとって、しかも、「一見この法則と矛盾するような現象」をとって、自己を貫徹するかを解明するところに、はじめて科學が成り立つ。それゆえ、これらの現象は、まず、價值法則を明らかにし、この法則の必然的な現象形態としてこれらを説明するのだから、およそ科學的な説明にはならない。したがって、この正しい方法をとらずに、「一見この法則と矛盾するようなあらゆる現象」を最初から (von vornherein) 『説明』 (“erklären,)^(註1)しようとするれば、科學以前に科學をもってこなければならぬことになる。これは、まさに、科學そのものを、『現象的説明』におきかえること、かくしてそれを歪めることを意味する。たとえば、リカードは、その名著、『經濟學および課税の原理』の第一章、「價值論」において、まず、「一貨物の價值、もしくはこれと交換されるべき他の貨物の數量は、その生産に必要な相對的勞働量によって定まり、その勞働にたいして支拂われるべき報償の多寡によって定まるものではない」(第一節の冒頭)として、彼の價值法則を定式化しているが、たんなる商品交換關係の現象はこれを捨象して、この價值法則を抽象的に考究し、しかるのち、しだいにより高度の、より複雑な諸範疇の説明に上向して行くべきであった。だが、彼は、このような正しい方法をとらず、むしろそれとは反対に、これらのより高度の、より複雑な諸關係および諸範疇——たとえば、勞賃、資本、利潤、平均利潤率、固定資本と流動資本、市場價格——をば、すでに與えられたものとして前提し、さらに、價值法則から正しく上向的に展開して行くのではなくして——なんらの媒介環なしに——そのままこれらの諸關係および諸範疇が、どこまでこの價值法則

に對應するかどうか、あるいはどこまでそれらがこの法則を修正するか、これらの妥當性(Adäquatsein)をいかに價值法則から直接に證明しようとしている。これは、まさしく、科學以前に科學をもつてくるものであり、方法的にみても全くの誤まりといわなければならぬ。このような、科學的方法の無視は、ついに彼の理論をして重大な破綻に陥れたものであるが、その基本的な誤まりは、すでに價值法則そのものの理解においてあらわれている。右に擧げたりリカードの價值法則にかんする、冒頭の定式化の内容が、それである。ここでは、「一貨物の價值」が、そのまま、「これと交換されるべき他の貨物の數量」と同一視されている。これは、さきに述べたごとく、價值と交換価値との同一視にほかならぬ。^(註11)

(註11) マルクスがこの説明という言葉に引用符(“ ”)を附しているのは、きわめて教訓的である。この引用符は、その本質が本来あるべきものに相當しないもの、あるいはエセモノ(似而非もの)にすぎないことを明示するものであって、いかんながら今日のわが國の經濟學界には、この種の引用符(または括弧)付き『理論』および『資本論學者』があまりにも多いようである。

(註12) 價值と交換価値との同一視とは、いいかえれば、價值の形態を識別しえないことである。この點の論究はのちにゆずり、ここでは、右の第一節冒頭の文章にあらわれた價值と交換価値との同一視が、はやくも、第一節において採り上げられた「労働の價值」という言葉の中に、端的かつ集中的に表現されていることを指摘しておく。リカードは、なるほど、スミスにおける投下労働説と支配労働説との自然的混同から一步をすすめて、支配労働説を排し、投下労働説を經濟理論の基礎、出發點として、ここから一貫した資本主義社會の理論體系をつくり上げようとしたのであるが、しかし、「労働の價值」において事實上、投下労働と支配労働とを混同せざるをえなくなり、かくして、剩餘價值の源泉——資本の本質——の追求において、ついに破産に陥つたのである。

⑥ 「だじかに他方では、貴方が正しく想定されたように、價值關係の理解が、明瞭不明瞭の差こそあれ、また幻想によって飾られ

ているか科學的に規定されているかの差こそあれ、つねに同一であったことは、學說史の證明するところだ。思惟過程そのものが諸關係から生ずるものであり、それ自身ひとつの自然過程なのです。現實的に把握する思惟は、つねに同一のものでしかないのであって、發展が成熟し、したがってまた思惟の器官が成熟したのちに、漸次に相違してくるにすぎません。それ以外のことはすべてたわごとなのです。

「價值關係の理解」が「つねに同一であった」とは、どういうことであろうか？ さきにもふれたごとく、「價值關係」とは、人間の勞働が商品の價值として、また、これら商品の交換を通じて、あらわされるといふ關係である。それゆえ、「價值關係の理解」とは、これを要約していうならば、商品の價值を人間の勞働に歸着させることである。なぜ、生産物—商品が價值をもち、他人の生産物—商品と交換されるか？—それは、これらの生産物—商品にひとしく人間の勞働が含まれているからである、と。このような「理解」は、もともと廣い意味での「勞働價值說」にほかならない。

なんらかの形で、なんらかの方法で、商品價值を「勞働」に歸着させる理論は、早くからおこなわれていた。マルクスは、學說史がこれを證明すると述べて、なぜ、「つねに同一であった」か、その理由を説明しているが、その説明は、要するに、周知の命題——意識が存在を決定するのではなく、かえって存在が意識を決定する——に歸着する。思惟する過程そのものは、人間の勞働が商品の價值として、商品の交換を通じて實現される社會的關係のもので、その諸關係のうちから發生してくるのであるから、それらの諸關係を現實的に把握しようとする思惟は、^(註)いつでも同じものにならざるをえない。價值關係の理解は、必然的に勞働價值說に歸着せざるをえないのである。

(註) 現實的に把握しようとはせず、もっぱら私的、『公的』利害の辯護または正當化に奉仕せんがために現實をことさら歪めて『説明』しようとする諸『理論』は、この場合問題にならない。これらの『理論』にとっては、むしろ非科學的であることが、

その身上なのである。

だが、ここに注意を要するのは、この、「同一の価値關係の理解」をあらわす、労働価値説の内容である。眞面目に現實を把握しようとする學者は、つねに商品の価値の背後に、人間の労働を見出した。そこで、商品が価値をもつのは、そこに人間の労働が費やされているからであり、その価値の大小さは、そこに投下されている人間の労働の量によつてきまるといふ、一般的な、「自然的な」、命題がうちたてられた。これは、もっとも一般的な、もっとも「自然的な」、したがって、またもっとも素朴な、労働価値説である。

だが、たんなる商品交換、たんなる価値關係からすんで、これの諸關係が發展し、さらにより高度の、より複雑な諸關係が生み出され、かつ支配的となるにつれて、「価値關係の理解」―労働価値説も、しだいにその「效力」を減殺せざるをえない。ここに労働価値説そのものの分解の危機がおとすれる。リカアドゥは、もっとも良心的に現實を把握しようとする理論家であるが、しかも、資本主義的諸關係の支配を前にして、彼の労働価値説に重大な訂正を加えざるをえなかったし、ついには、労働価値説にもとづく彼の理論全體の破産をもたらさざるをえなかった。このことはすでに、⑤について觸れたところである。

では、なぜ、スミス、リカアドゥは、労働価値説を堅持し、その理論體系を一貫して築き上げることに成功しなかったか？ それは、右の労働価値説の内容が、あまりに一般的にすぎ、したがってまた、根本的な缺陷をふくんでいたからである。もし、一般に人間の労働が商品の価値としてあらわれるのであるならば、なぜ、商品生産社會以前の諸社會において、労働生産物は価値をもたなかったのか、あるいは、一定の価値をもつものとして交換されなかったのか？ 人間の労働が、人間および社會の生存の基本的條件であることは、「どんな子供でも知っている」。だが、人

間の労働、したがって労働生産物がどの社會にも必要であるとはいえ、どの社會においても、その労働生産物が價值をもち、交換に供せられる商品になるとはかぎらぬ。むしろ、それは、人間社會の發達のあるきわめてかぎられた、一段階においてのみ、價值をもち、商品となる。

ここにおいて、商品價值をたんなる人間労働一般に還元することの誤まりが明らかになる。商品價值を正しく把握するためには、特定の、歴史的な社會的關係に注目しなければならない。特定の、歴史的な、生産關係のもとにおける人間労働のみが、^(註)はじめて商品價值となる。したがって、労働價值説が眞に科學的なものとして經濟解論の基礎、出發點たらしめられるには、さきのごとき一般的「自然法則」的内容よりすすんで、特定の、すぐれて歴史的、社會的な内容のものに改造されなければならない。ここに、マルクスの労働價值説が、他のあらゆる種類の労働價值説——その比較のもとでも優秀なものは、いうまでもなく、スマイス、リカードのそれである——と本質的にことなり、唯一の科學的基礎理論たりえた根拠があるのである。

(註) この特定の生産關係のもとにおける人間労働も、それがたんに労働一般として價值を形成するものでないことは、すでに別稿において價值の法則を説明したさい(前出)に、強調しておいたところである。このことはのちにもふれるが、要するに、マルクスが、労働をば具體的有用労働と抽象的人間労働との二側面に正しく分解して考察したこと——労働の二重性の發見確立——が、その樞軸點となつていたのである。

要するに、この⑥で述べられているのは、すでに指摘したごとく、きわめて一般的な形においてとらえられた労働價值説が、なによりもまず、人間労働および労働生産物の必要という、さきの第一の自然法則そのものに客觀的根據をもっているという事實にほかならない。ただ、商品價值を人間労働に還元することは「つねに同一」であつたとし、それが「幻想によつて飾られているか」、「科學的に規定されているか」の本質的差異は見逃されてはならぬ。

い。ここにもまた、「問題たる事象」および「科學の方法」にむすびつく、重要な意味が含まれていると見なければならぬ。

四

⑦『俗流經濟學者は、現實の日々の交換比率と價値の大きいとが直接的に同一ではありえない、ということに全然氣がつかない。ブルジョア社會の機才は、まさに、生産の意識的、社會的な規制は、そもそものはじめからおこなわれぬ、という點にあるのです。理性的なものや自然必然的なものは、ただ盲目的に作用する平均としてのみ、みずから貫徹するのです。そこで、俗物は、内的關連がはくろされてみると、事象は現象においては別の趣きを呈すると主張して、それで一大發見でもしたつもりなのです。實際は、かれは、假象にしがみついてこれを最後のものと考えなのだ、と主張しているわけです。これでは、いったい、科學はなんの役に立つでしょうか？』

右の⑦のパラグラフは、この「クーゲルマンへの手紙」を好んで引用する多くの人々によって、故意にかあるいは無意識的にか、見落されているものである。だが、わたくしは、この⑦のうちにこそ、この手紙の本質的内容の一半が、きわめて判りやすく、しかも適確に述べられている、と考える。

古典派理論でさえ、價値と交換價値とを明確には區別することができず、きわめて非科學的な勞働價値説に終始せざるをえなかったことは、すでに述べたとおりである。まして、「外見上の連絡の範圍内だけをうろつき廻って、いわばもっとも粗雑な諸現象のもっともらしい説明」に憂身をやつしている俗流經濟學者にとっては、現象すなわち日々の交換比率と、本質すなわち價値の大きいとが直接的には同一でありえないなどということは、まったく理解の外にある。價値法則は、「一見この法則と矛盾するような現象」を通じて、自己を貫徹するのである。價値の大きいと交

交換比率＝交換價值とは現實には、つねに一致しない。それは、交換比率＝交換價值のたえざる變動を通じてのみ、終局において、あるいは、觀念的に、または、平均的にのみ、一致する、なぜならば、さきにも説明したごとく、私的所有にもとずく商品生産社會においては、社會的分業も自然發生的であり、「社會的勞働を一定の比率で配分すべき必要」は、直接的には、つねに「一定の比率で配分されえない」という形において充たされるからであり、「生産の意識的、社會的な規制がもともとは行われぬ」からである。

この、價值と交換比率＝交換價值との、辨證法的關係を明らかにし、しかも交換價值の具體的な諸形態を追究したのは、マルクスである。ところが、このような、本質と現象との關係を暴露されたのちにおいても、現象面にのみとらわれている俗流經濟學者たちは、なお、その辨證法的關係を正しくとらえることができず、現象は本質と異なった様相を呈するという主張をもって一大發見でもしたつもりになる。これは、つまるところ、これらの俗物たちが、現象をもって最後のなものと考えているからにほかならない。このような、現象のとらえ方にあくせくしているものにとって、科學はおよそ無用である。そこには科學の存しうる餘地はまったくない。

この⑦は、要するに、さきに、③および④で述べたところを、さらにくりかえして、しかも、俗物の誤まった表象を實例として、平易かつ適確に説明したものである。それゆえ、さきの③の内容は、この⑦の説明と照し合せて、これを正しく理解することにつとめなければならぬ。そこで、いま、例解のために、⑦の中の文章を③の中に織り込むことによって、③の内容を豊富にしうるものとすれば、つぎのごとくこれを表現することができるであらう。

「社會的勞働を一定の比率で配分すべきこの必要が、社會物生産の一定の形態によってはけつて揚棄されるものではなく、ただその現象様式を變えらるのみだ、ということも、自明のことです。ブルジョア社會の機才は、まさに、生産の意識的、社會的な

規制は、そもそもはじめからおこなわれたい、という點にあるのです。理性的なものや自然必然的なものは、ただ盲目的に作用する平均としてのみ、みずから貫徹するのです。社會的勞働の關連が個人的な諸勞働生産物の私的交換とおこなわれているような社會状態において、勞働のこの比率的な配分の遂行される形態は、まさに、これら生産物の交換価値なのです。俗流經濟學者は、現實の日々の交換比率と價值の大きさが直接的に同一ではありえない、ということに全然氣がつかない。

科學の本領は、まさに、價值法則がいかに自己を貫徹するかを解明する點にあるのです」。

これによって、③の内容がそのまま、價值法則そのものの説明ではないことは、明らかである。また、「日々の交換比率」が「交換価値」にほかならないこと、したがって、價值法則によって規定される「價值の大きさ」を離れて交換比率＝交換価値が日々變動し、このたえざる乖離、變動を通じて、「社會的勞働の比率的配分の必要」が、「盲目的に作用する平均としてのみ」みずから貫徹する、ということも、明白である。

⑧「しかし事象は、この場合、なおもうひとつの背景をもっています。關連への洞察とともに、實踐的崩壊にさきだつて現存狀態の永遠的必然性にたいするいっさいの理論的信念が崩壊するのです。だから、この場合、内容空疎な混亂を永遠化することが、支配階級の絶對的利益なのです。そして、經濟學上では一般に思惟してはならぬ、ということよりほかにはなんらの科學的切り札も出さないお追従的饒舌家たちは、それ以外のなんのためにお手當をもらうのでしょうか？」。

これまで見てきたように、現實の日々の交換比率と價值の大きさが直接的には同一ではありえないというところから出てくるところの、價值の大きさを規定する價值法則は妥當しないのだというような、マルクス價值論にたいする反駁、あるいは、現象は本質とはちがった趣きを呈するといつて自分で一大發見をしたつもりになっている俗物の主張、——これらのものが、本質と現象との辨證法的關連を見ることのできない、非科學的な『理論』にすぎない

いことが、暴露されているだけではない。さらに一步をすすめて、マルクスは、これらの俗物的『理論』の、客観的な、社会的役割をついている。価値と交換価値との辨證法的關連を明らかにすることは、価値そのものを、特定の、歴史的な生産關係と結びつけて理解すること、總じて、商品生産を社会的生産の特殊な、歴史的形態として把握すること、かたく結びついている。したがって、価値と交換価値との關係の正しい洞察は、ただちに、商品—資本主義社會が歴史的に過渡的なものにすぎないという正しい結論に結びつくのである。このような結論は、「現存狀態の永遠的必然性」の上にきずかれた支配階級の利害に眞に向うからぶつかるものである。それゆえ、支配階級の利害にすすんで奉仕することを身上とする俗流經濟學者は、現象は本質とちがうではないかということをしゃべりまくって、本質にたいする正しい洞察、現象と本質との辨證法的關連の把握を、積極的に妨害しなければならぬ。ここに内容空疎な混亂を永遠化するための、あらゆる色合いの反駁、主張、斷定がたえまなくつくり出されることになる。

このようにして、マルクスは、價值論というような、一見もっとも抽象的な理論的問題の領域においてすら、すでに、理論闘争が必然であること、しかも、その理論闘争の背後には、階級的利害關係がかくされていることを、的確に暴露しているのである。

この⑧のパラグラフに述べられたところをしめくりとして、ふたたび③および④の内容をかえりみると、そしてまた、ここに述べられている、俗流經濟學者たちの反駁が、ひとえに現實の日々の交換比率と價值の大きさとの現象的差違の點に向けられていることを思いあわせるとき、③の「交換価値」が、けっして價值と同じものとして述べられているのではなくして、むしろ、價值と量的に（その基礎には質的差異がある）異なったものとして述べられているということが、いっそう明らかとなるであらう。

以上のようにみてくるとき、この「クーゲルマンへの手紙」の各パラグラフは、けっして個々別々に考察すべきものではなく、むしろ反對に、これを全體的にみることによって、各パラグラフ相互の緊密な關連をとらえることによつて、はじめてその豊富な全内容が把握されうる、ということがわかる。これまで各パラグラフ別にその内容をとらえ、すすんで各パラグラフ相互の目立った關連を指摘してきたが、なお、全體としてみると、これまでの説明では不充分的のそしりを免れたいであろう。いま、その缺陷を補う意味において、かつは、これまでの個別的考察を要約する意味において、つぎに、若干の結論を述べておくことにしよう。

五

まず、この手紙が論破している當の『理論』は、どういふものであろうか？

それは、第一には、日々の交換比率が價値の大きさとはちがっているというところで、勞働價値説を否定しようとする、俗流經濟理論である。勞働時間によつて價値の大きさがきまるとの價値法則は、現實の交換比率についてみるとき、つねに行われていないではないか、概念と實在とは一致しないではないか、と。このような反駁が、およそ科學の方法に無縁のものであることは、すでに述べたとおりである。また、右の不一致を理由に、まず價値概念を説明すべきである。というような、一見もつともらしい反駁についても、同様である。これらの、俗流理論の側からの反駁が、たんに科學の方法を無視したものであるばかりでなく、さらに、支配階級の利益擁護の意圖にもとずいたものであることも暴露された。

だが、この手紙によつて論破されているのは、右のような、まぎれもない反科學的な俗流理論だけではない。科學

的な理論たろうと努め、同じく労働價值説を採用しながら、ついに科學的な價值理論を打ち樹てることに失敗した古典派理論、とりわけ、スミスおよびリカードの理論も、この手紙によって、平易に、しかも適確に論破されている。では、スミスおよびリカードの理論的破産は、根本的には何にもとずいているか？

それは、なによりもまず、「生産の歴史的、社會的形態」を見きわめることができず、これを「生産の自然的形態」と混同したことにある。^(註)ここからして、價值と交換價值との同一視、使用價值生産と價值生産との自然的混同が生じ、かくして、ついに科學的な價值法則の把握に失敗したのである。

(註) この、致命的な、基本的缺陷の故に、かれらは、價值、貨幣、資本、等の諸形態を正しく理解することができず、これらを「生産の自然的形態」と見なしたのである。

では、スミス、リカードの價值法則と、マルクスのそれとの根本的相違は、どこにあるか？

まず、はじめに、この手紙の中で述べられている、二箇の自然法則を見ておこう。第一の自然法則は、社會存続にとって必要な労働生産物を繼續的に生産するためには、労働が不斷に行われなければならないということ、さきの表現をつかえば、社會的労働の必要、である。第二の法則は、いうまでもなく、この社會的労働を比率的に配分すべき必要である。さきにも指摘したごとく、この二つの自然法則は、社會的労働一般、あるいは、抽象的人間労働がそのままと上げられているのではない。その具體的、有用的性格の面について云われているものである。第一の法則は、社會存続の條件としての諸使用價值の生産、したがって具體的労働の必要をあらわし、第二の法則は、社會的労働が、その具體的な有用な形態において一つの體系だった社會的分業に組織されることの必要をあらわしている。

スミス(リカードをも含めて)は、この自然法則からただちに價值および價值法則をひき出す。それは、労働に

よつてあらゆる使用價值＝富がつくり出されるという事實から、直接に、労働が商品價值の唯一の源泉であり、またその眞の尺度でなければならぬ、とする。彼にあっては、労働生産物の使用價值をつくるのも、商品の交換價值をつくり出すのも、いづれも同じ労働、社會存続の要件としての労働一般である。ここからして、労働はつねに價值を、使用價值と交換價值とをつくり出すという結論がひき出され、したがつてまた、價值と交換價值との同一視が自然に生れる。このようにして、價值をつくり出す労働の特殊な社會的性格が見逃され、商品生産社會は人間社會一般に解消されることになる。

要するに、スミス、リカアドゥにあつては、さきの二つの自然法則から直接に、價值法則がひき出されてくるのであつて、この價值法則なるものは、労働がつねに労働生産物の價值＝交換價值をつくり出すのと同様に、文字通り自然法則にすぎないのである。^(註)

(註) スミスは、價值法則の問題をば、「いかなる法則が交換價值を決定するか」という形で提起し、これにたいして、ある物品の價值とは、それと交換に得られる他人の生産した生活必需品および便益品であり、したがつて、その所有者の支配しうる労働の量によつてきまる。それゆゑ、労働はあらゆる物品の交換價值の眞の尺度である、とこたえた。リカアドゥはといえば、さきに見たように、スミスの支配労働説を排し、價值法則をつぎのように定式化したのである、——「一貨物の價值、もしくはこれと交換せられるべき他の貨物の數量は、その生産に必要な相對的労働量によつてきまる」と。

このような、價值法則の古典的定式化に對比してみると、等價交換をもつて價值法則なりとなす現代的『定式化』が、いかに粗雑きままるものであり、また超時代錯誤的であるかは、云わずして明らかである。ところが、この種の超時代錯誤的『價值法則論』をふりまわすにとどまらず、この手紙を一讀するだけで明白なスミス、リカアドゥとマルクスとの本質的差異を抹消して、リカアドゥもマルクスも、ひとしく「等價交換＝價值法則」論の信奉者なのだと主張する、驚くべきマルクス價值論の『解

が主張されているのである。たとえば、そのもっともいぢるしい見本としては、名和、赤松兩教授による『國際價值論』をが挙げられる。

では、マルクスにあってはどうか？ マルクスは、スミスのごとく、使用價值＝富、およびこれをつくる勞働一般をその出發點としたのではなく、まさしく、勞働生産物が自らを表示するところの、もっとも簡単な社會的形態、すなわち、商品をその出發點としたのである。この商品を、しかもまず、それが現象するところの形態において、すなわち、使用價值および交換價值において、これを分析する。この分析により、使用價值に結果するところの具體的有用勞働と、交換價值に結果するところの抽象的人間勞働とが、すなわち、周知の勞働の二重性が明らかにされる。たんなる勞働一般ではなくして、この二重性の一面たる、抽象的人間勞働の對象化したものが、商品の價值にほかならぬ。かくして、價值の實體が明らかにされることにより、一方においては、價值法則の内容が嚴密に把握されえ、他方では、價值の現象形態としての交換價值と價值との關連が明らかにされる。このようにして、まず、勞働生産物の社會的形態、勞働の社會的性格をとらえたところに、マルクスの價值理論の科學性が存するのである。^(註)

(註) 『資本論』冒頭において何故に商品が分析されているか」という、周知の問題の意義は、これに照らしてみても、明白である。ところが、このまぎれもないマルクスの指示に眞つ向うから反對して、冒頭の商品分析の意義をば、かえって自然法則に解消せしめようとする『理論』が今日も主張されているのである。——曰く、「靴の生産者と皮革の生産者というような、個々の商品生産者たち相互の關係、個々の商品生産者たちがお互に他人の必要とするものを生産して協力し合っているという關係、お互のために勞働しあっているという關係——この關係こそ商品生産社會を、したがって資本制社會を、成立せしめている基礎的な關係であり、資本制社會の全經濟的構造は、この關係の上に築かれているのである。それゆえ、この關係こそ資本制社會のもっとも一般的な、もっとも捨象的な關係であり、マルクスはこの關係から出發する」(宮川實教授著、『資本論研究』第

一號、二四ページ、傍點—山本。

ここにくりかえし強調されている「協力しあっている關係」とか「お互のために勞働しあっている關係」とかいろいろのは、自然必然事としての、あらゆる社會において行われ、社會的分業一般のことを指すものでしかない。ところが、このような自然法則が宮川氏の資本制社會においては、「そのもつとも一般的な、もつとも捨象的な關係であり、マルクスは、この關係から出發する」のである！ここではまぎれもなく、言葉の上でのすりかえがおこなわれている。マルクスが出發點とするのは、自然法則どころではなく、——これはスミス、リカードの出發點である——もつとも簡単な、もつとも捨象的な生産關係をあらわす、「もつとも簡単な社會形態」たる商品にほかならぬ。さらに驚くべきことに、宮川氏の資本制社會にあつては、資本家と賃銀勞働者との協力關係(!!)、失業者と慢性的遊休設備との協力關係(!!)が、その基礎的な關係となつてゐるのである！この種の、萬能の、「協力關係」によつて冒頭の商品の意義を云いくるめることが、いかにマルクスの理論を歪めるものであるかは、どんな子供にでもわかる。そこで宮川氏は、さらに「物神性」という言葉を援用される、——曰く、「ところがすでに述べたように、資本制社會では、すべての生産關係は物の形態をとり、物の關係として現われる。したがつて、資本制社會の基礎をなしてゐるところの、このもつとも一般的な、もつとも捨象的な・生産關係——ばらばらな・互に獨立してゐる・私物生産者たちがお互のために勞働しあつてゐるといふ關係——も、物の關係として、たんなる商品と商品との關係として、現われる。それだからマルクスは、資本制生産諸關係のこの基礎となつてゐる關係を、物の關係として・たんなる商品と商品との關係として、研究したのである。資本論がたんなる商品の分析からはじめてゐるのはそのためである」(前出、二四ページ)。

宮川氏の『研究』によれば、マルクスは協力關係という、かの超歴史的必然事をば、物の關係として、たんなる商品と商品との關係として、研究したのである！ここにもまた、宮川氏特有の萬能的「持ちつ持たれつ論」が貫徹されてゐることはまぎれもない。だが、「物の關係として」といふ「物神性」は、このような協力關係が現われたものではけつしてないのである。念のためつけ加えれば、協力關係をもつて、資本主義社會のもつとも一般的な生産關係なりとする主張は、真正正銘のブルジョアの經濟理論であり、またこの種の協力關係をふりまわすことによつてこそ、いっさいの辯護的俗流理論がみ出されてゐるのである。

ところで、さきの二つの自然法則は、マルクスの價值法則にあっては、どのような意味をもつか？ 簡単にいえば、第一の法則、すなわち、社會的勞働の必要は、商品生産社會においては、勞働生産物の價值性格という、社會的形態をとり、第二の法則、すなわち、社會的勞働の比率的配分の必要は、勞働時間による商品價值量の規定という、社會的形態をとる。この兩者を合して、われわれは、これを價值法則と呼ぶことができよう。なぜならば、勞働時間による價值規定は、當然に、特殊な社會的勞働の規定を含み、むしろ、この價值を形成する社會的勞働の質の規定に重點をおくものだからである（前出、拙稿参照）。では、價值法則という社會的形態をとった、またはとらざるをえなく、さきの二自然法則は、そのまま價值法則に一致した形態においてみずから貫徹するか？

この間に答えるためには、われわれは、二つの歴史的に相異なつた社會形態について考察しなければならぬ。

まず、生産手段が社會的に所有されている社會では、さきの二自然法則は、いかに遂行されるか？ すでに社會的所有により、各成員の勞働は直接に社會的な勞働である。この場合、直接に社會的勞働たりうるのは、各成員の勞働がそのまま社會的分業の一肢體を成しているということ、すなわち、具體的有用勞働の面において直接に社會的勞働である、ということである。それゆえ、ここでは、この直接的な社會的勞働をば、社會が計畫的に配分することによって、二つの自然法則は遂行せられる。

ところが、私的所有にもとづく社會では、各成員の勞働はそのままでは私的勞働にとどまり、それらの生産物は社會の必要を充たすものとはなりえない。この私的生産物の交換を通じてはじめて、各人の私的勞働は——抽象的人間勞働として、またはいいかえれば、價值として——社會的勞働になる。だが、このように、私的勞働が社會的勞働たることを實證し、あわせて各私的生産者の勞働が社會的分業の一肢體を成すことを實證するところの、私的交換

は、さきの社會的所有にもとずく社會のごとく、二自然法則を直接的に、もつとも理想的に貫徹せしめるであらうか？ いいかえれば、一定の價値量としていいあらわされた社會的勞働は、そのまま交換において實現されるか？ いうまでもなく、否、である。もしつねに私的勞働が交換により社會的勞働となり、しかもその社會的勞働の量に正確に對應して交換が行われるというのであれば、社會における勞働の配分は、計畫的に配分されたのと全く同じく、理想的だ、ということになる。この場合には、現實の日々の交換比率は、つねに價値量に正確に一致し、價値變動にもとずかぬ價格の變動は生じえないことになる。だが、これはまったく事實に反する。私的所有にもとずく私的勞働であるが故に、社會的勞働の配分はつねに無政府性によって支配せられ、適當な比率に落ちつくことはありえない。そこで第二の自然法則が貫徹されるためには、價格の價値からの乖離が必然となり、交換價値 \parallel 價格の變動により、社會的勞働の配分は、事後的に訂正されることになる。このようにして、たえず交換價値 \parallel 價格が價値から離れて變動することにより、また變動するが故に、第二の自然法則は、事後的に、きわめて曲りなりにも、「盲目的に作用する平均としてののみ」、貫徹されるのである。

かようにして、價値および價値法則と交換價値との辨證法的關係をば、さきの二自然法則に結びつけて、正しく把握するところに、科學が成り立つのであり、かくして古典學派の價値と交換價値との混同を適確に克服しえたところに、マルクスの價値法則、一般的にいつて彼の價値論の巨大な科學的意義が存するのである。この手紙において、マルクスが、くりかえし、「科學の方法」、「科學の本領」あるは、「科學」と述べているのは、實に、俗流經濟理論および古典派理論との本質的差異を明示したものにほかならぬ。^(註)

(註) それゆえ、わが國敗戦の翌年、高島善哉教授が、いち早く『價値論の復位』という論文を著わし(昭和二十一年八月、雜誌

『經濟評論』所收、「今一度正統學派の勞働價值論にまで復歸すべし」、と主張しているのは、まことに非科學的な『提唱』といわなければならない。『復歸』すべきは、つねに科學的價值論へであつて、A・スミスのごとき、すでに八、九十年前にマルクスによつて批判しつくされた非科學的價值理論へであつてはならない。しかもこの場合、『復歸』という言葉を使用することは、不適當であり、誤まりである、なぜならば、科學的經濟理論は、すでにマルクスの價值論を基柢として八、九十年前に確立されしかもその基礎理論の上に、資本理論、帝國主義理論、社會主義理論、等々が動かしがたく築き上げられているからである。第二次大戰は、たんにこの科學的理論を實證しただけであり、またこれを基礎としてのみ、正しく分析されえたのである。科學的價值論は、瞬時といえども、その科學的基礎理論としての地位を失つたことはなく、また失うこともありなかつたのである。この『復歸』という言葉は、價值を人間勞働一般に求め、したがつて、人間價值への『復歸』を要請する、古典的ヒューマニズムへの『復歸』を示すものと考えられる。これは、科學的理論をヒューマニスティックな觀念によつておきかえようとする試みをあらわす一種の反動的『理論』と解せられても止むをえないものである。

さて、以上によつて、「クーゲルマンへの手紙」の主要な内容は、ほぼ明らかにされたとと思われる。要するに、それは、マルクスの勞働價值説の本質的差違點を明らかにし、同時に、科學的價值理論の方法を明快に説明したものである。もちろん、價值法則についての説明も見出されるが、それは價值法則の内容そのものを説明することに重點が置かれてゐるのではなくして、いわば價值法則の自然的根據、および、價值法則が自己を貫徹する形態を説明したものである。①、②、③をもつてき、これを價值法則そのものの説明なりとすることは、はなはだしい錯誤といわなければならない。

以上により、前號の拙論において擧げられた諸『定式化』の正否のほどは、およそ判斷されうるであらう。すくなくと、『勞働配分決定の法則』『價值法則』という『定式化』が、その論據をこの「クーゲルマンへの手紙」に求め

るかぎりにおいて、それが、全く見當はずれの『論據』を援用していることが明らかになったであろう。だが、右の『定式化』は、なお他にいまひとつの『論據』を有している。それは、マルクスの「市場價值および市場價格」論である。われわれは、つぎにこの點に立ち入って、右の『定式化』の科學的價值を追究しなければならぬ。^(註)

(註) 價值法則にかんする諸『定式化』の科學的價值を判斷するもつとも手つとり早い方法は、二つの全く相異なつた『定式化』をつき合せて検討することである。

たとえば、名和、赤松兩教授は「等價交換||價值法則」論を、したがって、「不等價交換||價值法則のモディフィケーション」論を、執拗に主張されている。この種の『定式化』の『有効性』は、これを、「社會主義社會における價值法則の變^{モディフィケーション}容」の問題に適用することによって、ただちに一目瞭然となるであろう。「等價交換||價值法則」は、いいたい、社會主義社會では、どのような意味において、「不等價交換||價值法則の變容」となるのか？ この場合に殘された唯一の方法は、あるときにはひとつの『定式化』をとり、他のときには全く別の『定式化』をとるといふ、理論的無原則性のみであろう。

また、さきの手紙の③をそのままとってきて、野々村氏は、「交換價值・價值によって労働の比例的配分が實現されること||價值法則」論をつくり上げられるが、同じくこの種の『定式化』の『有効性』は、これを「國際間における價值法則のモディフィケーション」の問題に適用することにより、ただちに一目瞭然たらしめられるであろう。このことは、また、「社會主義社會における價值法則の變容」をもつて、「資本主義社會の母斑」、あるいは、一種の不合理な、「殘存物」と見なす、宇野教授||副島氏の「價值法則變容」論についても、同様である。だが、社會主義社會における價值法則の變容の問題は、當然のことながら、資本主義社會における價值法則の究明のうちに、嚴密に検討されるべきものであり、したがって次稿の「市場價值および市場價格」論のつぎにあらためて詳細に論究されるであらう。